

農大造園100周年ブックレット
第1集

農大造園の遺産史

～東京高等造園学校から始まる物語～



東京高等造園学校 目黒校舎（昭和初年頃）

東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科
農大造園100年研究会

農大造園の遺産史 目次

■東京高等造園学校、東京農業大学（造園科・緑地土木科・緑地学科・造園学科）の教員たち

中国をリスペクトした造園学者	後藤朝太郎	三
ネイチャースタディを掲げ公園児童指導に尽力	末田 ます	四
日本人ランドスケープアーキテクトの先駆者	戸野 琢磨	五
農業経済学者・東京農業大学初代学長	横井 時敬	六
西洋造園史の研究に尽力した造園界のサラブレッド	針ヶ谷鐘吉	七
公園と緑に生涯をかけた造園家	井下 清	八
防空緑地の重鎮	木村 英夫	九
人と自然を繋げた造園人	江山 正美	一〇

■東京高等造園学校、東京農業大学（造園科・緑地土木科・緑地学科・造園学科）の卒業生たち

遅咲きの造園家	吉村 巖	一
京都古名園の保存に尽力	久恒 秀治	二
実物主義に徹した樹木研究者	林 弥 栄	三
北国に生涯をささげた文才作庭師	岸村 英雄	四
用と美の造園手法を忘れない造園美	伊藤 邦衛	五
日本造園教育の礎石	河原 武敏	六
園学の提唱者	野澤 清	七

凡例

本書は、『東京農業大学造園学科創立70周年記念 卒業生名簿／七十年史』（1994）に掲載された教職員、卒業生を研究会メンバーで読み合わせをおこない、そのなかで顕著な業績を有する15名を選定し、その生い立ちや造園活動の概要を整理したものである。

高等造園や農大造園の卒業生には、のちに本学科で教鞭を取った人物もいるが、本書では卒業生として取り扱った。

次の100年先を展望するために、 これまでの100年の軌跡をたどりたい

東京農業大学地域環境科学部造園科学科の前身は、東京高等造園学校です。高等造園は、明治神宮内苑の造成や関東大震災にともなう公園緑地の重要性を痛感された上原敬二先生が、これからの時代は造園の体系化と造園技術者の養成が急務であるという強い意志にもとづき創立されたものです。大正一三年（一九二四）に創立された高等造園は、日本初の造園家養成教育機関でした。

東京高等造園学校は、昭和一七年（一九四二）に東京農業大学に併合され、東京農業大学専門部造園科、緑地土木科、緑地科、農学部緑地学科、造園学科を経て、平成一〇年（一九九八）より地域環境科学部造園科学科となって現在に至っています。令和二年（二〇二〇）で創立九十六年を満しました。

東京高等造園学校から東京農業大学造園科学科に至るまでの九十六年間は、数多くの名作を世に生み出してきた作庭家、公園緑地や都市環境のデザインに手腕を発揮した造

園設計家、国立公園の風景地計画や広域の観光地計画を主導した計画家、現場で実空間を作り上げる技術家を多数輩出してきました。

ただし、顕著に活躍した高等造園を含む農大造園の卒業生の足跡は、実はまとまった形で整理されてはいません。名前は聞いたことがあったとしてもその業績は説明できないことが多いのです。そこで、農大造園の一〇〇年を目前に控えた令和二年（二〇二〇）より、高等造園を含む農大造園の卒業生や教鞭をとった教員たちの人物史的概要をまとめる活動を開始しました。同年一月末から有志でメールのやり取りを始め、三月初旬から研究会でのミーティングを重ね、活動目的を共有しました。しかし新型コロナウイルスの感染拡大によって活動は一時中断したものの、その後オンラインミーティングとウェブサイトによる情報収集、各自の個別調査をおこないました。

ここに掲載された情報のほとんどは、すべてウェブサイ

トによるものです。その理由は、新型コロナウイルスの感染拡大によって学生・教員のキャンパスへの立ち入りが禁止され、造園科学科の各研究室や造園情報センターに所蔵されている文献資料をまったく活用することができなかったからです。ただし、限られた情報で学生ひとりひとりが熱心に調べたことはまぎれもない事実です。

あと四年後に農大造園は創立一〇〇周年を迎えますが、あくまでも一〇〇年は通過点であり、次の一〇〇年を見据えることが大切です。この農大造園一〇〇年研究会の冊子はこれまでの一〇〇年の軌跡をたどったものですが、それは次の一〇〇年を展望するための足がかりだといえるでしょう。

令和二年 八月

◆近代庭園マップ東京研究会2020 メンバー

井上 琴海、岡田 梢、古屋 僚大、（以上、東京農業大学地域環境科学部造園科学科3年）、荒井 宏大、熊谷 太佑、小山 拓朗（以上、同造園科学科4年）、呉 京樺（東京農業大学大学院造園学専攻博士前期課程1年）、金澤 弓子（東京農業大学地域環境科学部造園科学科准教授）、栗野 隆（同造園科学科准教授）

後藤 朝太郎

「こうとうあさたろう」

Goto Asataro

1881-1945

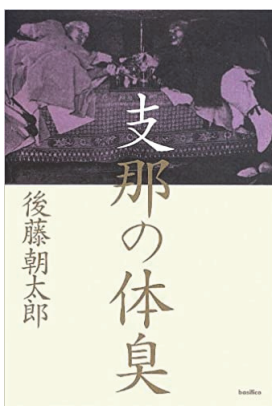
略歴:

明治14年(1881)愛媛県生まれ。明治40年(1907)東京帝国大学文科大学言語学科卒業。文部省嘱託で漢字研究、さらに自由に中国の民俗や文化を研究し、100余冊の著作を世に出した。



中国研究家で、中国庭園の研究者として知られるのが後藤朝太郎である。社団法人日本庭園協会の有力メンバーであり、東京高等造園学校で志那庭園論を講じた。東京帝国大学文科大学言語学科に入学、同窓に橋本進吉、一年後輩に金田一京助が入学している。在学中にマックス・ミュラーの『言語学』(博文館)を翻訳、出版し、早くも識者間にその存在を知られるようになった。卒業の後、文部省嘱託で漢字研究、さらに自由に中国の民俗や文化を研究し、『支那風物詩』『支那庭園』代表作として『支那の男と女』『支那の体臭』などがあり、百余冊の著作を世に出した。たびたび大陸を旅行し、普段も支那服を愛用していたというエピソードもある。

代表作である「支那の体臭」日本を代表する中国を愛した学者が初めて、長い歴史を持つ中国の変わらない社会基盤の根本を流れる人々の生活や、その圧倒的な活力と匂い。一九二〇、三〇年代の中国の風俗探訪を書いたものである。また庭園に関して、「近代日本の造園界にとって大東亜戦争は何だったの



『支那の体臭』
昭和3年(1933) 初発行



『長江千里』
昭和13年(1938)



『支那長生秘術』
昭和4年(1929)

か」という論文で、東亜共栄圏造園文化の交流・支那庭園と環境というものを書いている。

参考資料: 後藤朝太郎、東急東横線～:

<https://blog.goo.ne.jp/514303/e/e3da89bf8f48ca233171931490f15ed9> (2020.06.27)

東京農薬大学造園科学科編「造園用語辞典 第三版(p191)」(彰国社)2017年

図版: 後藤朝太郎(1933):支那の体臭: 大空社

後藤朝太郎(1938):長江千里: 高陽書院

後藤朝太郎(1929):支那長生秘術: 富士書房

Sueda Masu

1886-1953

略歴:

明治19年(1886)山口県生まれ。
カリフォルニア大学、コロンビア大学
で学び、大正6年(1917)に卒業。在
米中に同郷の末田福太郎と結婚し2
女を生む。

1923年の帰国と同時にYWCA(キリ
スト教女子青年会)に入る。
「児童遊園」の著書を刊行するなど、
当該分野の後身者の啓蒙や育成に
も尽力した。



末田 ます

すえだ ます

ネイチャースタディーを掲げ

公園児童指導に尽力

◆作成・文 井上 琴海
東京農業大学地域環境科学部造園科学科 三年

児童遊園と遊び場の必要性をいち早く痛感し、その理論と実際を研究するために渡米し、帰国後の一九二三年、YWCA(キリスト教女子青年会)に入る。

その翌年の一九二四年、東京市公園課長であった井下清の要請で、東京市公園課の高級嘱託となる。一九五〇年(昭和二十五)に東京都を退職するまで、児童公園(現・街区公園)における児童の遊戯指導一筋に邁進した。

一九二四年六月、子供たちを自然の中で遊ばせたいという思いから、日比谷公園の児童指導にあたる。日比谷公園内の霞が関一帯を特設児童遊園として、ネイチャースタディー(自然学習)というコンセプトで児童指導にあたった。最初は植物や花、野菜作りについて勉強する。植物や花は野生のものから培養のものまで学び、そして、接木や挿木も学ばせていた。その後、深川公園や錦糸公園の巡回指導も行った。(※ネイチャースタディー…アウトドアでの集団遊びによって子供の心身共に健全な発達を促す)



『児童公園』末田ます著
昭和17年(1942)

末田ます先生は児童指導において、三つのことに重きを置いた。第一に指導者が子供を好きでなくしてはならない。第二に、ゲーム指導その他の技術を修得していなければならぬ。そして第三に、自然を愛し自然を理解している人でなければならぬというものであった。

衛生的で安全な遊び場を目指した末田先生は、遊びの四元素(自然界にある火・水・木・土)を取り入れず、公園の三種の神器と呼ばれるブランコ・滑り台・砂場を積極的に設置した。東京市が一九三〇年代の初頭から、大公園に特設の児童遊園を設け児童指導員多数を配置したが、これは末田先生の尽力によるものである。

また後に、井下清や上原敬二の他、日本保母学校校長であった石原キク等とともに、社会法人日本児童遊園協会を設立する。

参考資料:

- 野尻裕子(2004):昭和初期の児童公園に関する一考察 児童公園指導員の役割と健康観:川村学園女子大学研究紀要 15 (1)
- 進士五十八(1983):日比谷公園の総合的研究(1):日本建築学会関東支部研究報告集54
- 進士五十八(2013):日本の近代公園史、緑の東京史(第69回 建設産業史研究会定例講演): https://www.ejcs.co.jp/library/history/69_kouen.pdf (2020年6月14日参照)
- 木下勇(2006):遊びと公園のエコロジー:水の文化(24)
- 大石洋平(2018):末田ますの児童指導:東京農業大学2018年度卒業論文

戸野 琢磨

との たくま

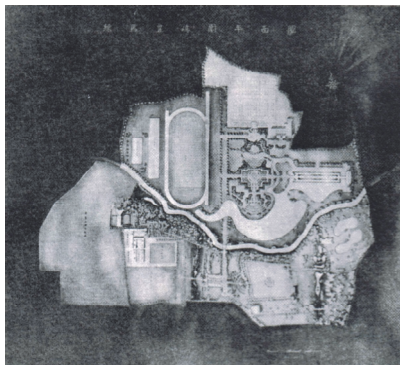


Tono Takuma

1891-1985

略歴：

明治24年（1891）大阪府生まれ。大正2年（1913）北海道帝国大学農学部卒業。その後、アメリカのコーネル大学ランドスケープ学科を2年で卒業。修士課程へ。代表作に「としまえん（1926年開園）」、「ポートランド日本庭園（1967年開園）」、著書に「欧州の庭園」がある。



豊島園計画平面図

戸野琢磨は大正二年（一九一六）に北海道帝国大学農学部を卒業後、渡米しコーネル大学のランドスケープ学科に進学。二年で卒業し修士課程に進学、大正十年（一九二一）にランドスケープ修士号を取得した。造園分野では日本人がアメリカの大学での学位の取得は初だった。その後、早稲田大学で非常勤講師として、東京農業大学では教授として活躍した。

並行して、大正十三年（一九二四）からは日本初の造園設計事務所「戸野事務所」を開設。「札幌東本願寺墓苑」、「石橋迎賓館」、「豊島園」、「資生堂アートハウスの庭」、慶応義塾大学の「日吉のイチヨウ並木」などの設計を行った。

また、ブルックリン植物園の「砂と石の庭」、「Garden Mayne Dear Libraryの日本庭園」、「ポートランド日本庭園」など海外でも作品を多く手がけた。

ポートランド日本庭園について

戦後十五年を経た昭和三五年（一九六〇）頃、米国オレゴン州ポートランド市に日米両国の友好と親善の場として日系人会や地元市民らの間で日本庭園築造の機運が高まり、昭和三八年（一九六三）には正式にオレゴン日本庭園協会が設立された。そこで設計者には当時、北米中心に活躍していたコーネル大学ランドスケープ学科出身の戸野琢磨が選ばれた。ポートランド日本庭園の設計を契約したときはすでに七十一歳であった。戸野琢磨は庭園の敷地から選り設計した。平庭、石庭をはじめ、上池、大瀧、さつき山、藤棚を手がけた。

参考資料：

- ・ポートランド日本庭園のディレクターシステムが果たした役割・意義と国際交流の多面的効果：
http://yoshoen.co.jp/image_02/pdf/2-g.pdf （2020年06月26日参照）
- ・平 欣也（2019）：ポートランド日本庭園はいかに生まれたか：三恵社
- ・土沼 隆雄、鈴木 誠（1999）：ポートランド市ワシントン・パーク日本庭園の形式過程の特徴に関する考察：日本建築学会計画系論文集 64(521), 195-202

横井時敬

よこいときよし



Yokoi Tokiyoshi

1860.1.29-1927.11.1

略歴:

安政7年(1860)に現在の熊本県に生まれ。明治13年(1880)東京駒場農学校農業本科(東京大学農学部的前身)を首席で卒業した。日本の農学者・農業経済学者で、東京帝国大学教授・東京農業大学初代学長である。明治31年(1898)『栽培汎論』、明治34年(1901)『農業経済学』、明治37年(1904)『農学大全』を著す。『稲のことは稲に聞けら農業のことは農民に聞け』という言葉は有名。昭和2年(1927)没

横井時敬(よこいときよし)は、熊本県出身、横井久衛門時教の四男として生まれる。父時教は武士の横井小楠の高弟である。時敬は、幼少の頃より父に侍の道を厳しく叩き込まれたという。明治四年熊本洋学校に入學。明治十一年(一八七八)九月駒場農学校農学本科(東京大学農学部)を首席で卒業。日本の農学者・農業経済学者で、東京高等造園学校顧問・東京帝国大学教授・東京農業大学初代学長である。明治四四年(一九一)から昭和二年(一九二七)まで東京農業大学学長として日本最初の私立農学校を大学に昇格させるなど、農業教育の発展に尽力した。時代の当面する様々な問題を学問的裏付けに基づいて論じ「農学栄えて農業滅ぶ」「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」という言葉を残した。画期的な塩水選種法を考案する。横井時敬が駒場農学校を卒業した前後の時代は、明治政府の農業政策の転換期にあたり、農政の基本方向が、西洋農法の移植から在来農事の改良へと大きく変わった。「老農崇拝熱」が盛んになり、「明治三老農」をはじめとする老農たちが全国で

起用され、駒場などを卒業した農学士たちは冷遇された。駒場農学校でイギリス人教師たちからイギリス農学を学んだが、日本の稲作などに直接的には役に立たなかった。しかし、近代農学の学理に基づき、地域の老農たちなどとの交流の中から、横井氏が生み出した技術が塩水選種法である。塩水選種法は、近代農学者の最初の成果であり、今日でもその技術が用いられていることから解るように、画期的な農民的技術であった。最初の近代的稲作技術書「稲作改良法」を刊行したものである。榎本武揚が廃校を決意していた東京農学校を大学令による財団法人東京農業大学へと育てたのは横井時敬に他ならない。東京農業大学こそ、横井時敬が後世に残した最大の遺産である。



横井時敬と東京農大
(東京農大出版会)

参考資料:

- 友田清彦生誕150年横井時敬の足跡日本における近代農学の開拓者:<http://www.nodai.ac.jp/research/teacher-column/0260/> (2020年6月28日参照)
- 建学の理念 -実学主義の伝統-:[http://www.nodai.ac.jp/kyoumu_F/book/2008handbook\(oh\)/p0-30/bin004.html](http://www.nodai.ac.jp/kyoumu_F/book/2008handbook(oh)/p0-30/bin004.html) (2020年6月23日参照)

針ヶ谷 鐘吉

はりがや しょうきち

Harigaya Shokichi

1906－没年不明

略歴:

明治四年(1906)生まれ。
昭和2年(1927)東京帝国大学農学部に入
学。
昭和7年(1932)～昭和15年(1940)東京
高等造園学校講師。西洋造園史を講義。
昭和15年(1940)～昭和18年(1943)武
蔵高等工業学校建築学科講師。造園
学を講義。
昭和44年(1969)～昭和51年(1976)東
京農業大学農学部造園学科講師
昭和53年(1978)農学博士取得。
平成3年(1991)日本造園学会上原敬二
賞受賞。



出典: 西洋造園変遷史

針ヶ谷鐘吉は、日本の西洋造園研究家で曾祖父は田安家に仕えた庭師の家系といういわば造園界のサラブレッドともいえる生まれである。生涯にわたり西洋造園史に対しての研究、調査、論説などに取り組み、尽力した。東京高等造園学校で西洋造園史について講義し、その後多くの学校で講師として活躍。東京農業大学でも約七年もの間造園学を指導していた。また、多くの書籍を残している他、自身で古本の文庫「大久保文庫」なるものを開設するなど幅広い分野に対して従事していたことが調査から分かった。

片平幸氏の「往還する日本庭園の文化史」には、コンドルの日本庭園論に対する評価・分析が今現在においても未熟である事が訴えかけられている。そもそも情報不足である事に加え、針ヶ谷と佐藤昌のコンドルの日本庭園論に対する批評内容の詳細が第三者目線で記されており、参考になる情報が多く書かれている。

実際、針ヶ谷鐘吉や佐藤におけるコンドルの日本庭園論に対する批評はそれぞれの思想に基づいたものでもあり、コンドル自身が本当に伝えたかったことは何なのかを掘り下げる必要があると問題提起しているといった内容であった。

また、他の人物にまとめられた針ヶ谷鐘吉の思想の他に残る文献は多数存在するが、その中でも造園雑誌第一巻第二号(昭和九年六月)には、「明治時代の洋風庭園」という論説、及び資料を残しており、明治時代における近代庭園の遷移・展開していく様子を日比谷公園を最終的な日本の西洋庭園とし、三段階に分けてまとめている。

これらのことから針ヶ谷鐘吉は、日本庭園論や西洋造園史との比較・研究を行い、自らが生きた時代起こる造園界の変化の波の中でひたむきに造園と向き合ってきた。この紹介だけでは語りつくせない強いメッセージ性のある人物である。

参考資料:

- 針ヶ谷鐘吉(1934): 明治時代の洋風庭園: 造園雑誌 1 (2)、93-101
- 片平幸(2010): 往還する日本庭園の文化史: 桃山学院大学総合研究所紀要 35(2)、33-54

井下 清

いのしたきよし



Inosita Kiyosi

1884-1973

略歴:

明治27年(1884)香川県生まれ。明治38年(1905)東京高等農林学校卒業。大正12年(1923)に2代目の公園課長に就任。多磨霊園や帝都復興事業の52の東京市立公園を設計した。昭和20年(1946)に定年退職した後は、国土緑化推進委員会常任委員や東京農大の教授などを務めた。

わが国造園界の第一人者、東京市(都)在職四〇余年の間、東京市技師、公園課長、公園部長を務め、東京の公園・霊園・街路樹等に関して基礎を築き、その発展に尽くした人物である。昭和二〇一年(一九四六)東京農業大学教授となり、常務理事、事務局長を経て三〇三年退官。この間、東京都市計画審議会委員、同公園施設審議会委員、日本造園学会会長、同名誉会長、日本庭園協会理事、東京都公園協合理事長、大日本農会副会長など歴任した。

十の大業績(進士五十八『日比谷公園』より)
・井の頭公園・渋沢栄一と郊外公園計画
・長岡精神の継承と公園改良、街路樹改良
・日本初の庭園墓地・多磨霊園の設計
・帝都復興五十二小公園・校庭と公園の一体的配置
・寄付公園・貫い頭の井下先生
・日比谷児童遊園事業・公園での児童指導
・都市美運動と造園家の役割
・紀元二千六百年記念事業と皇居外苑の緑
・公共葬務事業の総合体系の確立
・緑の羽根・国土緑化推進委員会・首都緑化推進委員会



井下清が主導した震災復興小公園のひとつ、元町公園

日本庭園協会、日本造園学会の設立に参画した。公園デザイン、マネジメントに手腕を発揮し、組織としての基礎を築いた。また文化財保護、緑化、大学教育その他に貢献、著書に『公園の設計』『緑地生活』『街路樹』などがある。全国の造園関連事業の発展に尽くした。井下の東京市公園課の門下には、市川政司、相川要一、前島康彦など多数。

参考資料:

- ・ 日外アソシエーツ編集・発行(2004): 20世紀日本人名事典
- ・ 井下清(1928): 公園の設計: 雄山閣
- ・ 東京農業大学造園科学科(2017): 東京農業大学造園科学科編造園用語辞典第三版: 彰国社

木村 英夫

きむら ひでお



画像出典：木村英夫氏のご逝去を悼む（日本都市計画学会）

Kimura Hideo

1909 - 2001

略歴

明治42年(1909)鳥根県浜田に生まれる。

昭和8年(1933)、東京帝国大学農学部農科卒業。

戦時中は、東京緑地計画に続く戦時体制下での防空を含む総合都市計画などに尽力、戦後は戦災復興事業、県立自然公園指定に尽力。

日本都市計画学会名誉会員。都市計画学会、日本造園学会の名誉会員さらに日本造園修景協会の会長・顧問をつとめた。

平成13年(2001)没。(92歳)

木村は、中学校教師の父と九歳の時に亡くなった母の長男として生まれる。姉弟と共に父方の農家で、田植えや畜牛、養蚕を手伝った。父が神戸の甲南女学校に転任し西宮住まいになり、旧制甲南中学校甲南高等学校に学ぶ。進路選択では、叔父の影響で医学を希望していたが、父親の本棚にある植物の本を読み、植物に興味を持つようになった。父の教え子(西宮市土木課長)から「人を救うことなら市民の健康の保持に役立つ町の公園づくりはどうか」というアドバイスもあり、東京帝国大学農学部農学科に進学。丹羽鼎三に師事。昭和八年(一九三三)に卒業。

卒業後、大学で一年間の副手の後、内務省都市計画大阪地方委員会に二年、内務省、神宮司庁にも二年と就職難の折に事務嘱託を経験。昭和十二年(一九三七)に内務技手となり、内務省計画局都市計画課と防空総本部勤務で終戦を迎える。

昭和二十四年(一九四九)に埼玉県土木部計画課長に出世し都市計画の最前線を経験。昭和五五年(一九五〇)に秩父多摩国立公園の指定があり、周囲に県

立自然公園造成の計画が始まり、昭和二六年(一九五一)から昭和三十一年(一九五六)まで埼玉県計画観光課長も歴任した。

昭和三十三年(一九五七)に建設省計画局施設課長として国で約五年間勤めた。昭和三六年(一九六一)から再び埼玉県に土木部長に就任する。

第二次世界大戦前後で木村が経験した都市計画の最前線は、日本の都市計画史に必要不可欠な事を占めている。木村の著書『都市防空と緑地空地』はそのバックデータとして高く評価されている。

都市計画学会と日本造園学会の名誉会員さらに日本造園修景協会の会長や顧問をつとめたほか、歴史風土審議会、埼玉県都市計画審議会、群馬県都市計画審議会に関係し、活動の足跡を残す。また、東京農業大学造園学科や東洋大学工学、東京大学農学部や国土建設学院の非常勤講師も歴任。授業の担当だけでなく親身に学生の就職相談や斡旋をした。

晩年は、学会と実業界の関係を強固にすることの必要性を指摘していた。

参考資料:

- ・養茂 寿太郎・浦田 啓充・後藤 和夫(2000) : 上原敬二賞受賞者に聞く 木村英夫先生 : ランドスケープ研究 64(1), 61-64
- ・木村英夫氏のご逝去を悼む(2001) : 平野侃三・養茂寿太郎(日本都市計画学会)

江山 正美

えやままさみ



Eyama Masami

1906.11.24-1978.06.20

略歴:

明治36年(1906)山口県に生まれ。東京帝国大学卒業後、農学校や旧厚生省や戦災復興院、栃木県観光課長を経て農大教授に就任。日本造園学会会長も歴任した。厚生省時代には日本林業技術協会誌『林業技術』の編集委員をつとめた。

江山正美は、東京帝大農学部林学科昭和七年(一九三二)卒業した。樹形美に関する研究で農学博士号を取得した。大学を卒業した江山は、石川県松任農学校教諭となり、昭和十五年(一九四〇)厚生省体力局施設課に転じた。

昭和二十一年(一九四六)から昭和二十二年(一九四七)、戦災復興院計画課を務め、その後、厚生省国立公園部計画課を経て昭和二十九年(一九五四)栃木県観光課長を務めた。

昭和三四年(一九五九)東京農業大学教授となり、造園学科長などを務めた。昭和五二年(一九七七)退職、同大名誉教授となった。

昭和四二年(一九六七)から二年間、日本造園学会会長を務め、後同学会名誉会員となり、造園学・景觀論の権威で「自然景觀に関する研究」「庭園及公園の構成に関する研究」などの研究業績を残し、著書に『樹木と私達』『庭の文化史』などがある。

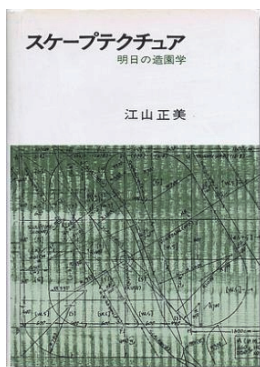
江山正美は東京農業大学農学部造園学科で学科長を長年つとめ、育成にあたってきた。また「国立公園」や「自然保護」といった協会雑誌で自然と人間の共存環境の哲学を語り、造園の計画論を展開した。

江山正美は国立公園思想から、近代造園学が人間を中心とする環境計画学、人間と自然空間の規制計画、管理体制、利用制限、施設計画、収容力について多くの研究をした。

昭和十四年(一九三九)、庭園に関する研究で、日本森林学会白沢賞した。

昭和二十七年(一九五二)、現代の造園形態研究で日本造園学会受賞した。

江山の死後、東京農大造園科学科では昭和五三年(一九七八)から遺族からの芳志を基金に、優秀な卒業論文を対象とする『江山賞』が開設された。



代表的著書
『スケープテクチャー』(1977)

参考資料:

- ・ 東京農業大学造園計画第一研究室 自然公園収容力研究グループ編(1974):自然公園における収容力に関する研究:環境庁
- ・ 日外アソシエーツ編集・発行(2004):20世紀日本人名事典
- ・ 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修(2001):日本人名大辞典:講談社
- ・ 江山正美 (1977) :スケープテクチャー—明日の造園学: 鹿島出版会
- ・ 江山正美のポートレートは鈴木誠氏提供

吉村 巖

よしむら いわお



Yoshimura Iwao

1900-1970

略歴:

福岡県小倉市に生まれる。
大正15年(1926)、東京都高等造園学校を卒業する。卒業後、横浜に吉村庭園創作所を設立する。
昭和28年(1953)に箱根植木顧問に就任する。
そのうち数々の作品を手掛け、代表作に「藤井邸庭園」、「小田急向ヶ丘遊園ロックガーデン」などがある。

昭和三年(一九二八)に景勝地経営論序説を発表する。昭和五年(一九三〇)には上原敬二らと金剛山公園計画第一回計画に参加し、昭和二年(一九二七)田村剛らと、佐世保市観光施設計画・西海国立公園候補地自然公園計画調査に参加し観光造園家と呼ばれた。またあだ名はガンさんであった。

大正一五年(一九二六)に東京高等造園学校を卒業後、横浜市に造園設計事務所である吉村庭園製作所を設立するが仕事に恵まれず、上原敬二の下で造園実務に従事した。その後、茨城県や滋賀県などに勤務する。昭和八年(一九四三)から二年間、中島飛行機三鷹研究所営繕課に勤務し、戦後再び造園設計事務所を設立する。

箱根植木顧問に就任した五三歳の時、造園設計者としての転機が訪れ、古典的な石組と噴水や整形式のプール、花壇など、和洋の要素を調和させた作品を多く生み出した。

昭和三七年(一九六二)に立石の造園的研究によって学位を取得する。

また造園作品では、旺文社中庭他一連の造園設計で日本造園学会賞を受賞する。
そのほか代表作に、「あわら温泉べにや(福井県)庭園」などがある。

『図説日本庭園大鑑』、『造園設計の実際』、『庭造百題』など多くの著書を残す。東京高等造園学校に転じる前は東京農業大学農芸科学科に一年間在籍していたためか園芸についての著書も数多く残している(『四季趣味の風流園芸』など)。



『庭造百題』 吉村巖
昭和8年(1933)



『住宅庭園』 吉村巖
昭和31年(1956)

参考資料:

- 西川友孝(1986):庭 別冊48-特集・駿河の庭 「雑草的人生の自分史 昭和初期の造園家たち7-観光造園家第一号 吉村巖氏:建築資料研究社
- 澤田忍編(2016):庭No. 225:建築資料研究社、p. 81.

久恒 秀治

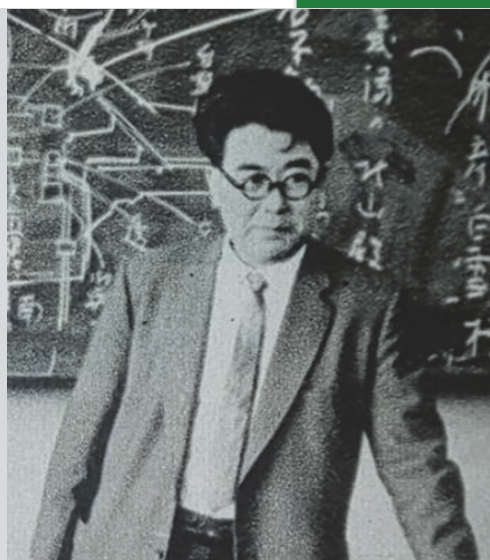
ひさつねしゅうじ

Hisatsune Shuji

1911-1982

略歴：

明治44年(1911)東京都四谷生まれ。昭和8年(1933)東京高等造園学校卒業。龍居松之助の龍居庭園研究所に学ぶ。京都の名園の修理・保存を多く手がけた。著書に「桂御所」、「京都名園記」、「作庭記秘抄」がある。



画像出典：農大造園学科卒業生写真集

久恒秀治（一九一〇—一九八二年）は、明治四四年、東京四谷に生まれた。父は建築家で『建築工事仕様及積算法』の著者の久恒治助であり、義理の弟は中根金作である。

昭和八年（一九三三）に東京高等造園学校（現東京農業大学の前身）を卒業後、龍居庭園研究所に学ぶ。

昭和九年（一九三四）、京阪地方の大風水害により京都府庁内京都風致復興会の嘱託となる。風致復興会解散前後より京都の庭園の実測を独力で開始し、作製した。その後実測図を多くも、日本庭園の研究を行うとともに、京都の古名園の修築を寺院と文部省に訴え、工事を促進、監督し、古名園の保存に貢献した。

昭和二五年（一九五〇）以後は甲府昇仙閣の庭を始め、個人依頼の庭を設計、監督した。



桂御所 実測平面図
(京都名園記 下巻より)

京都古名園の修理

昭和二二年（一九四七）、京都府庁の委嘱により西芳寺庭園を修理した。

同年、京都府知事の委嘱により金閣寺（鹿苑寺金閣）および銀閣寺（慈照寺銀閣）の庭園を修理。

昭和二四年（一九四八）、京都府知事の委嘱により天龍寺、西芳寺、西本願寺、智積院、清水成就院、南禅寺方丈、南禅院、金地院、大徳寺高桐院、高台寺などの古庭園を修理した。

参考資料：

- ・久恒秀治（1967）：京都名園記 上・中・下巻：誠文堂新光社
- ・東京農業大学造園科学科編（2011）：造園用語辞典 第三版：彰国社

◆作成・文 古屋 僚大

東京農業大学地域環境科学部造園科学科 三年

実物主義に徹した樹木研究者

◆作成・文 金澤 弓子
東京農業大学造園科学科 准教授

林 弥栄

はやし やさか



Hayashi Yasaka

1911.1.29-1991.4.23

略歴:

明治44年(1911)愛知県生まれ。
昭和10年(1935)3月、東京高等造園学校本科(現・東京農業大学造園科学科前身)卒業の後、農林省大阪営林局計画課、農林省林業試験場、浅川実験林勤務を経て、昭和44年(1969)4月より、東京農業大学農学部教授。林業試験場研究報告、植物研究雑誌などに多くの新品種を発表した。昭和30年(1955)、日本林学会賞(白沢賞)受賞。理学博士。

林弥栄は、広く日本の造園界、林学界に貢献した樹木研究者であり、その研究対象は盆栽から天然林の生態まで多岐にわたる。昭和七年(一九三二)、旧制東京高等造園学校本科(現東京農業大学造園科学科前身)入学。在学当時、「造園樹木学」の講義を担当していた山林局林業試験場長、白沢保美や、「森林学」の柳田由蔵に影響を受け、その後、牧野富太郎に師事する。在学中よりたびたび植物採集を行い、故郷・豊橋の「石巻山植物目録」を自費出版するなど植物の勉強に邁進、上原敬二の自宅にて実施されていた植物教室にも通っていた。

昭和二〇年(一九三五)に同校を卒業後、農林省大阪営林局計画課に勤務、施業案編成や風景計画等の業務のかたわら、近畿中国地方の植物調査を進めた。昭和二十二年(一九五三)より農林省林業試験場造林部勤務、農林技官として森林植物の分類等の試験研究を行う。昭和三〇年(一九五五)、日本林学会より「日本産主要樹種の天然分布、針葉樹」の業績に対し林学賞(白沢賞)が授与され、同年一月、林業試験場実験林(浅川実験林、現森林総合研究所多摩森林科学園)長となる。昭和三四年(一九五九)、Taxonomical and Phytogeographical Study of Japanese Conifersの論文を広島大学文理科大学に提出、理学博士の学位授与。多年に亘る全国踏査から、針葉樹類の分類の再検討を行い、日本産針葉樹類の天然状態についてまとめた。森林植物の研究を進める中で百数十種の新種の命名、十数万点の標本を作成し、日本の植物分類学の発展に寄与した。

参考資料:

- ・東京農業大学造園学科編(1982): 林弥栄先生の著作(東京農業大学農学部造園学科記録82-6号)
- ・林弥栄先生の古稀を祝う会(1981): 樹木と共に五十年
- ・林弥栄, 平井昌信, 興水肇(1987): 林弥栄氏に聞く(〔第4回〕上原敬二賞受賞者に聞く): 造園雑誌 50(4), p293-295
- ・小林義雄(1991): 林弥栄博士を悼む: 植物地理・分類研究 39(2), p77

岸村 茂雄

きしむら しげお



Kishimura Shigeo

1920~2010

- ・大正9年 茨城県水戸出身
- ・昭和17年 東京高等造園学校(現東京農業大学造園科)卒業
東京植木、岩城造園などを経て、昭和28年北海道に渡る。
- ・昭和30年 岸村庭園設計室を設立
- ・昭和48年 (株)スペースデザイン工業を設立代表取締役就任
- ・昭和49年 職業訓練指導員免許
- ・昭和57年 ミュンヘン市で開催された国際庭園博覧会札幌市出品庭園を設計。
- ・昭和58年 札幌における作庭をを中心とする一連の活動に対して東京農大第9回造園大賞を受賞する。
日本造園学会 会員、北海道デザイン協議会、監事等で活躍
- ・平成22年 永眠

岸

村氏は作庭家として活躍してきた他、多くの造園家を生み出した人である。東京で造園会社勤めたのち、北海道で会社を設立し、雪印種苗嘱託造園士としても造園活動を行い、創成川ルネサンスというプロジェクトのメンバーとしても活躍していた。

また、個人邸含む作庭の他、エッセイも多く残されており、垣根に対してや、北海道の造園庭とは何かの持論を展開するなど幅広く活動していた人物である。

当

時、岸村氏の設立した会社で共に働いていた笠 康三郎氏のエッセイには、

『遅筆で有名な方で、いつも穴を空けるのではと、編集者がハラハラしながら会社にやって来て、原稿が仕上がるのを待っていました。文章力もあり、作品にも光るものがありました。とにかく社会性がなく、ちゃらんぼらんな生き方をした方でした。でも私にとっては、大切な恩師の一人です。』

と記されており、自由なお人柄であつた事が伺える。

「美」の創造から「型」が生まれてきますが、「型」から躍動した「美」は生まれにくい。「美」は形式化された時から、その固定化が始まります。

「これから庭を造る人々へ」より引用。

この言葉は、岸村氏のエッセイの中にある言葉だ。凝り固まった固定観念こそ本来の美しさや個性を消してしまうものであるという岸村氏のメッセージである。

形

式に捉われない自由な発想、個性、自然体である事が作庭において重要だとする岸村氏の考え方は、後世の造園観においても、忘れてはいけないキーワードである。他にも数多くの名言が溢れる岸村氏の造園観が凝縮したエッセイに是非触れて欲しい。

参考資料:

- ・ 特定非営利活動法人 歴史文化研究所ホームページ: <http://otarugaku.jp/article/?c=4&s=8783> (2020年4月22日参照)
- ・ スペース・デザイン工業ホームページ: <http://www.sd-ind.co.jp/> (2020年4月22日参照)
- ・ 岸村茂雄 (執筆年不詳): これから庭を造る人々へ: 雪印種苗ホームページに掲載: https://www.snowseed.co.jp/wp/wp-content/uploads/grass/grass_195508_08.pdf (2020年5月12日参照)
- ・ 笠 康三郎氏ホームページ: <http://blog.sapporo-ryu.com/?eid=1962> (2020年5月12日参照)

Ito Kunie

1924.6.16-2016.9.29

略歴:

大正13年(1924)に広島県で生まれ。昭和22年(1947)3月、東京農業大学専門部緑地科を卒業し、清水建設入社、設計部に配属。昭和38年(1963)に独立し、伊藤造園設計事務所創立。東京農業大学講師、日本造園修景協会常務理事、日本造園学会理事を歴任。代表作「徳川園」「世田谷公園」「北の丸公園」「浜松城中央公園」「栃木県中央公園」「広島空港庭園三景園」など平成28年(2016)没。



伊藤邦衛

いとうくにえ

用と美の造園手法を忘れない
「造園美」

◆作成・荒井 宏大
東京農業大学地域環境科学部造園科学科四年

伊藤邦衛(いとうくにえ)は、日本三景の宮島、その対岸に大野町という町で大正一三年(一九二四)に園芸農家の八人兄弟の七番目に生まれた。血液型O型、広島県出身の日本の造園家、庭園家、環境デザイナーとして活躍した。

伊藤邦衛は、近代の錬金術師といわれる。平凡な形の巨石はもちろん、石山の雑割石や捨て石までもが、黄金に輝く風景にかわり、独特の空間に変身する。材料の素質を見抜く眼と、その良さを活かす腕であり、眼や腕は少年の頃の体験の中に芽生えがあった。「その辺にあるものでなんでも作れるのが住環境で日本の文化。材料を組みかえたり、割る行為が造る行為になったりするわけです」、「手にとった花を一目見て、残すところを残し、不用のところをパチンと切るわけです」とは伊藤の言葉であり、少年のころから、そういう雰囲気であったという。

昭和二十二年(一九四七)、東京農業大学専門部緑地科を卒業し、清水建設に入社し、設計部配属。清水友雄の造園法を学び、造園デザイン、発想において「清水友雄が第一人者」と信じている

という。世田谷公園の地割のパターンの「亀甲模様」は、清水さんから教わった手法である。昭和三十八年(一九六三)に独立をし、伊藤造園設計事務所を創立させた。大理石まじりの乱張りしたペーブルメントは、石材店の残材を経費をかけて碎石にして、集めて活用して大規模な造園をする伊藤作品の代名詞である。川や流れ、橋、園路。庭園内の施設に美しく効果的に仕上げられてきた。それを原寸大にすれば、地域開発・国土装景になる。伝統の造園技術精神を心に持ちながら、形と空間はいつても現代を創るという。

昭和四十四年(一九六九)、北の丸公園他一連の造園設計で、日本造園学会計画設計作品部門を受賞、昭和六十四年(一九八九)に第十一回日本公園緑地協会北村賞、平成六(一九九四)年には園芸文化賞受賞。



目白庭園
(発行：東京都豊島区)

参考資料:

- 新建築社編(1992): 目白庭園: 東京都豊島区
- 伊藤邦衛 (1975): 現代の公園: 建築資料研究社
- 伊藤邦衛 (1995): 伊藤邦衛先生最終講義要旨 私の造園論: 東京農業大学農学部造園学科

河原武敏

かわはら たけとし



Kawahara Taketoshi
1931.3.24-2013.4.25

略歴:

昭和6年(1931)東京都に生まれ。
(2000年-2003年)日本庭園学会会長。
昭和28年(1953)3月、東京農業大学農学部緑地学科(現・地域環境科学部造園科学科)卒業の後、東京都建設局にて造園技術者としての活躍を開始された。日本造園学会他と造園関連雑誌等にも数多くの論文・記事を発表した。

河原武敏は、東京農業大学農学部緑地学科(現・地域環境科学部造園科学科)を昭和二十八年(一九五三)に卒業(特待生・総代)、東京都建設局にて造園技術者としての活躍を開始した。

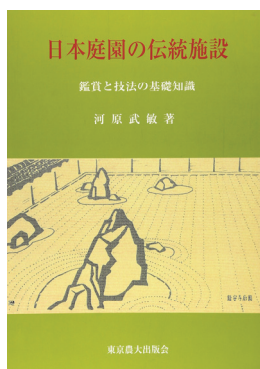
河原武敏は都庁在職は二十三年にわたるが、主な仕事は都立公園、墓園、文化財庭園の計画・設計・監督等仕事を数多くこなした。当時都庁造園職の間では「施設の河原」との異名を得ていたという。

また、『公園設計の手引き』『公園施設構造基準』など造園建設技術関係の手引き・構造物集・基準などを作成し、教育の礎となったという。

昭和五十一年(一九七六年)東京農業大学造園学科長であった江山正美から請われて、江山正美の後任として造園計画学第一研究室主任(後の庭園学・造園学原論研究室、現庭園文化研究室)を経て庭園学・造園学、庭園史・近代造園史の授業科目、実務経験を活かした「庭園学及び演習」などの設計演習等を担当した。

平成八年(一九九六)、短期大学部環境緑地学科教授に就任し、緑地計画学研究室主任、緑地計画学・庭園緑地計画学演習等を担当した。平成十三年(二〇〇一)東京農業大学定年退職。

日本庭園に関する専門的研究としては、「平安鎌倉時代の庭園植栽に関する研究」により東京農業大学より、博士(農学)を授与(論博一九九六)されている。中国庭園に関する造園学分野の研究者としても後年第一人者として知られ、中国上海同济大学や北京林業大学でも招待講演された。



代表的著書
『日本庭園の伝統施設』

参考資料:

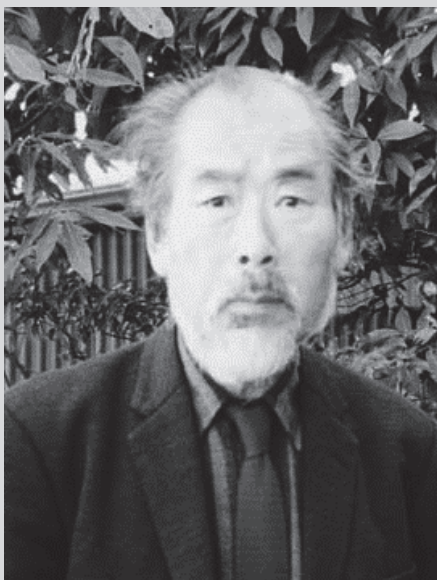
- 鈴木誠(2013): 河原武敏先生を偲んで: 日本庭園学会ニュース75号
- 東京農業大学造園科学科ホームページ: 造園科学科を支えた先生方の著作
https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/23262/publication_2/ (アクセス2020年06月11日)

Nozawa Kiyoshi

1932-2006

略歴

昭和7年(1932)生まれ。
昭和33年(1958)東京農業大学農学部造園学科卒業。卒業後2年間花屋を経験し、東京農業大学に戻り井下清に1年間従事。その後 荒木芳邦や中島健に師事した後、鈴木崇と野沢・鈴木造園設計事務所を設立。静岡市城北公園日本庭園で日本造園学会賞作品賞受賞。
園学を広めた人物。代表作に「世田谷美術館造園」「明治学院大学キャンパス」。「安穏廟及び境内修景」は長期にわたり、野沢清『園学』の聖地とも言われる。
平成18年(2006)没。(73歳)



野澤清

のざわ きよし

「園とは外光の下での
アメニティ(心地よい)
を感じる場」

これは、野澤の「園」の考え方である。彼の作品は、その場所に合った「園」の創出にある。そこには派手さや自己顕示性はない。デザイン、図面の特徴として、流れや園路等には独特な曲線が見られること、図面が大変緻密であることが挙げられる。

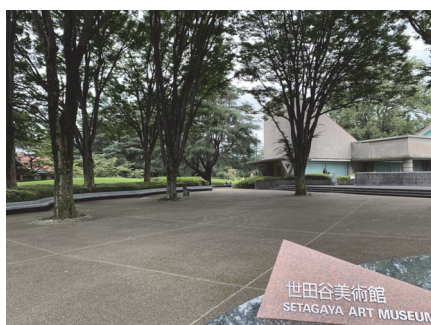
絵や工作が得意な子供だった野澤は、芸大を受験するが浪人し、絵で生きていくことは難しいと悩む。ある時、同高校出身の河原武敏氏が、「自分は農大で造園を学んでいるのだ」と周囲に堂々と話す姿に影響を受け、東京農業大学に入学、造園の道を志した。

農大卒業後、総合庭園研究室に勤務していた。荒木造園を経て、同僚であった鈴木崇氏と「野澤・鈴木造園設計事務所」を設立する。当時は伊藤邦衛氏の下請けを主に行っていた。造園家として活躍を始める代表作に、日本造園学会賞を受賞した「静岡城北公園」がある。それまで下請けの仕事が殆ど

だった野澤清の初の大きな仕事となった。

当時、野澤ほど緻密な設計が出来る造園家は少なく、これを機に、著名な建築家等と組んで仕事をするようになった。内井昭蔵とは、世田谷美術館で知り合い、互いの価値観や考え方に意気投合し、多くの作品を共同制作した。この関係は野澤の晩年まで続いた。

平成八年(一九九六)頃から「むだん」を名乗るようになる。その少し前から「園学」として自分の考え等をまとめ、それを興味を持つ人に見せていた。また「園学むだん塾」を主宰し後進の指導に、より一層力を注ぐようになった。



世田谷美術館

参考資料:

- ・宇佐美 璃菜 東京農業大学:「園」(その)をつくった造園家・野澤清の人と作品 (2012/03)
- ・野沢 清(1984): 静岡市城北公園日本庭園の設計について:『造園雑誌』 48(1), 1984年8月号
- ・野沢 清(1995): 建築士のための造園講座(1)『建築士』, 44(512),
- ・戸田芳樹(2019): 昭和の名庭園を歩く〜作庭のおもいとかたちを紐解く〜 マルモ出版

◆作成・文 小山 拓朗

東京農業大学地域環境科学部造園科学科

4年

あとがき

今回紹介させていただいた人物は、他界された方々です。素晴らしい造園活動に感謝致します。

造園科学科は創立より、約一〇〇年の間に造園業界を支える人物を多く輩出しています。今後の造園を支える人物を輩出できるよう教員・学生共々で精進してまいります。今後の活動にご協力宜しくお願い申し上げます。

「農大造園100周年ブックレット」第1集
『農大造園の遺伝史～東京高等造園学校から始まる物語～』

東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科
農大造園100年研究会

著	者：	呉 京樺			
		荒井 宏大	熊谷 太佑	小山 拓朗	
		井上 琴海	岡田 梢	古屋 僚大	
		金澤 弓子	栗野 隆		
表紙 裏表紙	デザイン：	小山 拓朗			
原稿	デザイン：	呉 京樺			
監	修：	栗野 隆			
発	行	日：	2020年8月27日		
発		行：	東京農業大学造園科学科庭園文化研究室		

東京高等造園学校

東京農業大学 専門部造園科

緑地土木科

緑地科

農学部緑地学科

造園学科

東京農業大学 地域環境科学部

造園科学科

令和6年（2024）



大正13年（1924）



Tokyo Nodai
Landscape
Architecture
Science

東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科
農大造園100年研究会